

『47 RONIN』 原題 47 RONIN 2013



©Universal Pictures

---

映画批評

『47 RONIN』 — 忠臣蔵のグローバル化

谷川建司 (映画ジャーナリスト)

© 2013.12.13.Takeshi Tanikawa.

高度経済成長期に量産された日本人にとっての国民の物語、すなわち「忠臣蔵」は、21世紀に入って新たな進化を示している。2010年にワーナー・ブラザーズ映画製作による『最後の忠臣蔵』が公開されたのに続き、今年(2013年)は全編、英語での台詞によるハリウッド映画の新作『47 RONIN』(ユニヴァーサル・ピクチャーズ/東宝東和配給)が登場した。

キアヌ・リーブス扮するハーフの青年カイ(魁)を主人公として四十七士の物語を描く『47 RONIN』は、真田広之(大石内蔵助)、浅野忠信(吉良上野介)、田中泯(浅野内匠頭)など日本の俳優陣が主要な役を演じているが、そのテイストは紛れもないハリウッド映画。キアヌや真田広之が戦う相手というのは、彼らの主君であった浅野内匠頭を切腹に追いやった野心家の吉良上野介だけではなく、森の中で暴れまわる六つ眼の怪物やら、菊地凜子扮する妖術使いのミツキが変身した巨大な白龍のようなモンスターだったりするので、3D映画ならではの迫力ある映像も楽しめる。

物語全体が森林地帯(浅野領)や山岳地帯(吉良の居城)を舞台にしているため、それが江戸時代の日本を舞台にした物語であるという感じは全くしないのだが、『ロード・オブ・ザ・リング』シリー

ズ(2001～2003年)や『ナルニア国物語』シリーズ(2005年～)に近い世界観で視覚的に統一されているため、逆に台詞がすべて英語であることは不思議と気にならない。



浅野内匠頭が切腹に際して辞世の句を短冊に書き記して残すシーンとか、大石内蔵助が四十七人全員の誓詞血判を求めるシーンなどでは普通に日本語で書いていて、話し言葉と文字との間で統一がなされていない点は気になるものの、武者たちの鎧兜のデザインや衣装の色使いなど、全体としておとぎの国的な非現実的イメージであるため、江戸時代の現実の日本とは別のパラレル・ワールドを見ているような気分させられる、と言えはよいだろうか。また、ディテールにこだわった作り方をしている点には感心させられる。たとえば、浅野家の家紋「丸に鷹の羽」を、旗指物の意匠のみならず、大石が一年間幽閉される旧浅野家の居城の、地下牢の格子扉の意匠にも用いている点。

また、「忠臣蔵」といえば山形模様の縁取りの付いた討入装束がトレードマークだが、実際にはこの討入装束は後の世の創作(人形浄瑠璃と歌舞伎『假名手本忠臣蔵』由来の意匠)である。本作では、大石らが吉良の居城に潜入するための方策として、吉良とミカの婚礼に対する祝賀の使者として隣国からやってきたエンターティナーたちに紛れ込んで目的を果たす、というアレンジにしており、その祝賀の使者たちの派

手な舞台衣装として山形模様のついた揃いの上着を大石らが着る、という使い方なので理にかなっている。

かつての戦後「忠臣蔵」映画では観客は百も承知だった約束事の数々など全く知らない日本の若い世代の観客や、「忠臣蔵」そのものを知らない海外の観客に対して、「忠臣蔵」とはこのような物語なのですよ、と教える上で過不足のない入門編になっている『47 RONIN』は、まさしく、21世紀に新たな段階に突入した「忠臣蔵」の進化形として楽しめる作品なのだろう。

## 映画情報

製作: ユニバーサル・ピクチャーズ

配給: 東宝東和

監督: カール・リンシュ/脚本: クリス・モーガン

出演: キアヌ・リーブス、真田広之、浅野忠信、菊地凜子、柴咲コウ、赤西仁

公式 HP: <http://47ronin.jp>

